

明日への学び

2012年 12月 15日 発行
 発行：福井県教育委員会
 福井県学力向上センター
 TEL：0776-20-0295
 メール：gakukyousei@pref.fukui.lg.jp

—世界中の人たちと互角に渡り合える福井人を創る—

2030年、今の小学生が働き盛りの日本は、どのようになっているでしょうか。

内閣府の予測によると、2009年に55.5兆ドルであった世界全体のGDPは2030年には107兆ドルと約2倍に拡大し、アジアのGDPも14兆ドルから43兆ドルと大きく増加します。一方、日本のGDPは、約5兆ドルから6兆ドルと、2割の増加に留まります。日本企業は、今後も多くの富を求めて、活動の場を日本からアジアに移すでしょう。人材も世界中から調達することになります。日本人は、外国人と共に働き、世界の人々と交渉することになります。

では、このようなグローバル化の中で必要な能力とは、どのようなものでしょうか。

OECDのアンドレア・シュライヒャーは、21世紀の教育が児童生徒に果たすべき役割として、①さらに速くなる変化に対応する、②まだ存在しない職につけるようにする、③まだ開発されていない技術を使う、④まだ起こると分かっていない問題に対処する、の4つを挙げ、「新たな状況下で自分の知識や能力をいかに適用できるか」が重要としました。

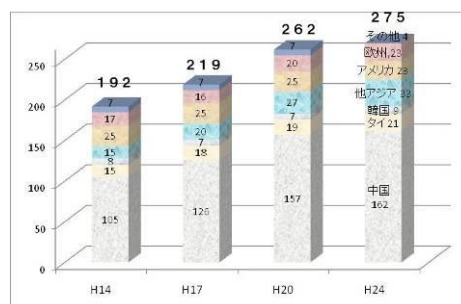
こうしてみると、一つは、海外の人たちと対話で互角に渡り合える力、もう一つは、思考力・判断力・表現力を培うことが、児童生徒にとって必要だということでしょう。

そこで、今回は、“海外の人たちと対話で互角に渡り合える力”をテーマにします。

その第一は、英語です。今後も引き続き世界の中心言語であり続ける英語をどのように使いこなしていくか。本県の教員の実践事例等を基に紹介していきます。

第二は、ふるさと教育です。日産のゴーン社長は、「グローバル化している人や会社、国というのは、自分たちのルーツに自信を持っている。グローバル化とは、強いアイデンティティと組み合わせることで成り立つ。」と言っています。言葉が通じなくても、最後はお互いの存在意義をかけて交渉する。ふるさと教育は、外国人と渡り合うための礎となるでしょう。

第三は、異文化交流です。世界は多様であると認識する。今後外国人と共に働き、無益な衝突を防ぐため、相手の価値観は自分と違うことを知らなければなりません。今回は、これらについて考察していきます。



福井の企業の海外進出も進む
 県内企業の海外拠点の推移 (福井商工会議所)

参考文献：内閣府「世界の潮流2010」、2010年

「ゴーン氏が語ったグローバル化の条件 —英語教育だけでは十分でない—」日経ビジネスオンライン

「21世紀に必要な力 (アンドレア・シュライヒャー氏提出資料その1)」国際交流教育政策懇談会第9回資料

英『エコノミスト』編集部「2050年の世界」文芸春秋、2012年

<目次>

○英語力、日本語力、知識量のバランスを大事に	P 2	○地域ぐるみで異文化と触れあう	P 12
○“英語”は“英語”のまま理解する	P 5	○研究発表会案内 (教育研究所)	P 14
○英語を通じて思考力を高める	P 7	○お知らせ	P 15
○“ふるさと”を心に据えて世界に羽ばたく	P 10		

英語力、日本語力、知識量の バランスを大事に

柴原 智幸

神田外語大学専任講師。放送通訳者・映像翻訳者。日本通訳翻訳学会・理事。NHK語学番組「攻略！英語リスニング」を担当。「1000時間ヒアリングマラソン」（アルク）コーチ。ブログ公開中。（<http://tsuhon.blog.so-net.ne.jp/>）



英語教育公開講座パンフレット
（神田外国語グループ）

○英語教員は、“スキルトレーニング”を徹底し、“ビジョン”を語れ

私は、子どもたちがグローバル社会の中で活躍していくために、大事にしなければならないのは、英語力、日本語力、知識量だと考えています。

まず、英語力ですが、これは言うまでもありません。しかし、私は、巷でいわれているほど切実な問題はないと考えています。企業でも英語を社内公用語化し、TOEICで730点以上とることが必須としているところもあります。しかし、これくらいであれば、英語を社内公用語化するまでもなく頑張れば誰でも取ることができます。本当に切実な必要性があるならば、990点を取ることを必須とすべきでしょう。しかし現実には、企業の側でも、十分に英語の必要性を踏まえないまま何となく流れで実施しているように思えるのです。英語教育においても、何が必要でどう教えるべきなのかを十分吟味するべきでしょう。英語でやり取りする内容も大切です。理想としては、国語、理科、数学など他の教科との連携も密にしていくことが重要だと思います。

英語教育の一番の問題は、学んだことをどう活用するのかという点が見えづらいことです。日本で生活する限りは、日本語だけで十分ですから。教室内では、子どもたちが英語の上達による達成感を得られるような工夫が大事です。私が英語を好きになったのは、英語が外界とつながった窓だったからです。高校生の頃は、普段は、学校と家と古本屋を行ったり来たりするだけの生活でした。しかし、県立高校の教員だった父が、東京で英語グループの集まりに送り出してくれたのです。そこでいろいろな人に出会い世界が広がりました。また、そういう集まりの中で、「高校生の割には英語が上手じゃないか」と言われてとてもうれしかったのを覚えています。

英語を教える教員にお願いしたいことは、スキルトレーニングのノウハウを蓄積しておくこと、そして、英語を使うことに関してビジョンを語ることです。スキルトレーニングとは、英語の4技能のトレーニングですが、自分の実体験を通して「こうやると効果的だ」という確固たる考えを持つことです。「この人についていけば英語はうまくなる」と生徒が思えるレベルを目指してほしいと思います。もう一つのビジョンを語ることは、「英語を使うとこういうふうに世界が広がるよ」、「英語を使ってこうしたいと思わないか」など、子どもたちがわくわくするようなことを語れるようになってほしいということです。

○小学校では“発音”、中学校では“構文”、高校では“読解力”を身につけて

小・中・高、それぞれで英語をどのように教えていくかについてですが、まず小学校では、発音が正しくできるようにしてほしいと思います。小学校の英語は、教員も専門の教員はいませんし、非常に難しいですが、勉強を重ねて子どもたちに発音指導をお願いしたいと思います。

中学校では、構文を理解できるように進めたいと思います。Pattern Practice (※) というと時代遅れの英語指導法とされていますが、コミュニケーション重視の今の日本の英語教育を補完し、正しい英語を話すトレーニングとして重要です。大きな声を出して正しい英語を話すという練習を徹底することが実践的な英語力の土台となります。

授業をすると、なかなか英語が出てこない生徒がいます。勇気を持って、間違いをおそれずに話させることが必要です。一方、このことだけ続けると、子どもたちの中に「間違ってもいいのだ。」という雰囲気が出てきて、単語を並べるだけの英語しか話せないことになってしまう可能性があります。通常的生活レベルを越えて、ビジネスや学術レベルで外国人とやりあうためには、正しい英語を身につけることが重要です。

高校では、文法のしっかりした英語の文章をきちんと読み解ける力を養ってほしいと思います。時間はかかっても英語を正確に読み解ける力があれば、時間の方はトレーニングで短くなり、その後は飛躍的に英語力を高めることができます。受験英語との関連では、私は英語力＝受験英語力だとは思いませんが、受験英語を通してつける力は、英語学習に置いてかなり重要な部分を占めていると思います。ある程度英語力がある人は、受験英語程度はちゃんとマスターしているものです。受験英語は“受験勉強だけのもの”と思わず、英語力の向上に十分役立つものであるという認識を持つことが必要です。

※Pattern Practice 一定の文法に沿った文章について、主語を変えてみたり、疑問文にしてみたり、何通りにも言い換えてみて行う練習のこと

○英語を活かすためには“日本語力”と“知識量”が根底に必要

私が英語力以上に危惧しているのは、意外と見過ごされていますが、日本語力と知識量です。

まず、我々は、日本語で生活しているのだから、日本語力は十分あると考えていますが、実は、日常生活を日本語で送ることは、それほど高い日本語力がなくても可能です。しかし、自分の考えを言葉にする、相手に自分の考えを伝えるというのは、そのレベルでは対応できません。日本語のネイティブとしては、日本語の言語操作能力を磨き、十分にコミュニケーション力を持たせることが必要です。しっかりとした母語の力があるからこそ、英語でコミュニケーションする際に、日本語のコミュニケーションと違う点、気を付けるべき点に注意が払えます。例えば、外国人とのビジネスなどの場合、日本人同士なら「皆まで言うな」で分かりあえるところですが、細部まで伝える、決めるということが大事です。世界には、自分たちと違う文化やマインドを持った人たちが多数いるのです。学校生活の中で、ロジックを立てて正しく日本語で語る習慣を、子どもたちに身につけさせてほしいと考えています。

知識量についても重要です。この知識量には、思考力なども含みます。我々の人生に試験範囲はありません。答えの出ない問題もたくさんあります。英語ができて、自分たちの歴史、昨今の社会情勢などを理解していない若者が多数います。例えば、最近のシリアの問題があります。シリアの人たちは、情報統制が敷かれている中で、You Tubeなどを使い、必死に英語で現状を伝えています。しかし、流暢な英語を話す者でもこうしたことを知らない人がたくさんいる。シリアの人たちが、母国語でなく英語を使っているように、英語はこうしたコミュニケーションに役立ててこそ有効なのです。

日本の歴史についても、認識の足りない若者が多い。正しい歴史認識もなく、外国人と何を話すと言うのでしょうか。

知識量がないと、英語のコミュニケーションの内容も“スモールトーク（雑談）”になってしまいます。社会に出てから必要なのは、このような英語力ではありません。スモールトークを超えて話せるようになるためには、日本語、英語で様々な知識を手に入れることが必要です。“貪欲に知識を得る”そういう気持ちの強い子どもたちを育ててほしいと思います。

○英語教育は、ほかの教科とも連動している

知識量を増やすということを学校の授業で考えてみると、国語、社会、数学（算数）、理科、総合的な学習、道徳など、それぞれの教員が、子どもたちにできるだけ多くインプットし成長させていく必要があります。蜘蛛の巣を想像してください。この活動は長いたて糸をつくっていくことにあたります。そして、それぞれの知識を組み合わせさせて使えるようネットワークしていくことが必要です。蜘蛛の巣のよこ糸ですね。たて糸が短いと英語が流暢でもスモールトークしかできません。よこ糸がないと知識が深まりません。英語教育はほかの教科とも密接な関係があります。

○ALTの活用や英語キャンプなどの実践について望むこと

福井は、生徒一人当たりのALTの数が日本一多いということで、とても素晴らしいと思います。ALTには、子どもたちが正しい発音を行うよう徹底して指導してほしいと思います。大きな関門として立ちほだかってほしいのです。褒めて伸ばすことも必要ですが、何でも「Good!」と言ってしまうと、正しい英語が話せなくなります。小学校、中学校でも徹底してほしい。高校レベルで修正していくのは非常に大変です。教員は、ALTに対し、子どもたちが正しい発音で話せるようになることを具体的な目標として与え、サポートして行ってほしいと思います。

教員がALTに頼りすぎるのはよくありません。例えば、外国人が「こんばんは。」を正しく発音できないとします。その時に、私に正しい「こんばんは。」の発音方法を教えてほしいと言われても対応できない。こうした問題に適切に対応できるのは、「こんばんは。」の発音をマスターした外国人です。子どもの発音の弱点が分かったら、その克服に向けて、日本人である教員が手助けしていくことが重要です。英語キャンプも素晴らしい。しかし、生徒たちが、“外国っぽい雰囲気味わった”で終わらないように注意していかなければなりません。スモールトークで終わってしまわないように、経済情勢、社会情勢をテーマに議論を深めてほしいと思います。

○教員には、自分をさらけ出して子どもたちと対峙してほしい

以上、英語教育に関し、私なりの所見を述べてきました。教員も今までのやり方を変えなければならぬかも知れません。自分が作りあげてきたものをいったん解体して、もう一度作り上げる勇気が必要となります。新しいことへの挑戦は、生徒に対し、自信のない自分を見せることになります。そうしたことに恐れも感じるかも知れません。

でも、それでもいいのではないのでしょうか。英語の教員には、悪戦苦闘する後ろ姿を生徒に見せて行ってほしいと思います。勉強不足で分からないことがあるのは格好悪いことですが、私も授業では、そうした姿を含めて極力さらけ出すようにしています。苦悩しながら、教員が必ず次の機会に課題を克服していく。そうした姿を見れば、生徒も努力することについて学ぶはずで

私も皆さんと立場は違いますが、教師としての職を選んでいきます。プロとして、そうした頑張りも楽しめるようになりたいと考えています。 (2012年12月10日 ご本人にインタビュー)

全教員向け

“英語”は“英語”のまま理解する

—英語教員海外研修に参加した丸岡中学校 松田教諭の実践—

本年度から完全実施された中学校の新学習指導要領。英語は、全科目の中で、最も授業時間数の多い科目となりました。この要領では、英語の4技能（“聞く”“話す”“読む”“書く”）のうち、文法力、語彙力、長文読解力などの“読む”“書く”力が強化されましたが、小学校の学習指導要領にコミュニケーション重視の外国語活動が盛り込まれたことで、“聞く”“話す”の技能についても一段のレベルアップが求められています。小学校との連動を強め、この“聞く”“話す”の技能をどのように高めていくのか。8月に開催されたアメリカ・ニュージャージー州ラトガース大学の派遣研修に参加し、その経験を活かして授業を進めている丸岡中学校の松田祐樹教諭に話を聞きました。

○生徒は日本語を介さず“英語のまま理解”できるように

松田教諭は、授業全体の約90%を英語で進めています。「ラトガース大学の派遣研修に参加したことで、英語を使って行う授業を行う必要性をさらに認識しました。」と松田教諭は言います。「授業を日本語で行うと、英語を日本語に変換し、意味を考えて再度英語に戻すという思考をしてしまいます。これでは海外で英語を活用するのに時間がかかりすぎてしまいます。例えば「Understand?」と聞かれたら、「理解しましたか?」と解釈するのではなく、「Understand?」と言葉のまま捉えて理解しないといけません。「understand」の本来の様々な文脈をそのまま捉え、理解して、素早く反応していくことが大事です。」と続けました。



○まずは“単語”でもいいから“英語”できり返せるように

このような感覚を体得することを、英語教諭の世界では“英語がおりてくる”と言います。会話で英語をたくさん使うことで体感できるようになります。丸岡中学校の生徒でも、何人かはそうした感覚を会得しつつあるそうです。「この域に達すれば、文の中に単語が勝手に当てはまり、流暢に語るすることができます。派遣研修の時、私たちは、指導者から「授業では、子どもに多く話させなさい。」と教わりました。そこで、私から一方通行で行うことをできるだけ減らし、生徒自身が自分でできること、例えば、教科書本文の理解度チェックなどは宿題で行うようにしています。」とのことです。

松田教諭は、中学1年生に対しても4月当初から英語で授業を行います。「授業では、とにかく単語だけでもいいから発言するよう生徒たちに指導しています。コミュニケーションは、意図を相手に伝えること。単語だけでも良いから話をしようとするのが大事です。少しでも話してくれれば、私が文章にして返すことができ、それを聞いて生徒が「こんなふうに言うのか」と理解することができます。間違いを恐れず発言できるような雰囲気づくりを進めておくことも重要でしょう。」

○“聞く”“話す”と“読む”“書く”のバランスを大事に —文法力、構文力も強化—

「小学校では、“話す”重視の活動をしてきますから、中学校でも、“話す”を中心においた英語教育が大事だと考えます。しかし、英語学習の基本は、4技能をバランスよく、統合的にかつ総合的に習得すること。生徒には間違いを恐れずに“話す”ことを奨励していますが、いつでも間違ってもよい訳ではありません。授業中に文法や構文など“読む”“書く”ための時間を十分確保することで、4技能をうまくミックスし、正のスパイラルにつなげていくことが必要です。」と松田教諭は語っています。

○小学生の英語嫌いが増えていないか —小学校との連携を考える—

小学校との連動についてはどのように考えているのでしょうか。「本校の部活動見学等の際に校区内の小学生が来ることがあるのですが、先日、その小学生たちに英語が好きか聞いたところ、英語嫌いが多かったことがあります。小学校の外国語活動における評価基準は主観が評価に大きく影響します。教員は難しい舵取りをしなければなりません、子どもたちが、英語を使って対話することが楽しいという気持ちを持たせて中学校に送り出してほしいです。」

○英語の授業ではICTを活用できるような環境整備を

松田教諭は、英語の授業におけるICT導入が必要だと考えています。「話す”ための時間をつくるためには何かを削ることが必要です。そこで、板書の時間を減らせないかと考えています。生徒の理解状況に応じて教科書を補足したり、この授業で学ぶ内容の説明など板書を全てやめる訳にはいきませんが、デジタル教科書を導入すれば、板書していた内容の多くを映像で投映することができます。その結果空いた時間を“話す”ことに使いたいと思います。」と語っています。

○インターネットの活用も重要

また、インターネットの活用についても問題提起をしています。「生徒が不適切な書き込みをするなどの問題もあって、インターネットの使用を禁止する学校があります。しかし、実際にインターネットの世界をみると、様々な国のアクセントに合わせてスピーキングしているYouTubeのサイト、文法のチェックや文章校正をしてくれるサイトなどもあり、インターネットを使いこなすことで英語力の向上につなげることができます。インターネットの活用能力の向上も重要になってきているので、ステレオタイプ的に“インターネットは悪い”とするのは良くないのではないのでしょうか。」インターネットを禁止することは、不適切な書き込みというリスクを減らしますが、活用方法の習得を遅らせるというリスクもあることを考えて対処していくことも必要でしょう。

○“話すこと”についての勉強法

松田教諭の自己研さんの方法を聞きました。「大学在学中やアメリカの研修でもやりましたが、まず、テーマを決めて、思いつくまま英語で話し録音しておきます。そして、それを自分で聞きます。聞きながら紙に書きとめ、最後に読むという活動が有効です。我々英語教員でも、少しでも努力を怠ると英語で話すのが難しくなることがあります。そうすると、子どもの前で話す自信がなくなり、ますます“話す”授業ができません。当たり前のことですが、生徒は教員ができること以上には学ぶことができない。責任を持って自己研さんを進めることが大事だと思います。」インターネットの活用も含め、こうした気持ちを持って、教員が不断の努力をしていくことが必要になるでしょう。

全教員向け

英語を通じて思考力を高める

—理数科を再編し、今年1期生を迎えた若狭高校文理探究科主任三仙教諭の授業実践—

若狭高校は、本年度から、国際探究科と理数探究科からなる「文理探究科」が誕生しました。同校は、英語において新しい学習指導要領導入に向けた英語指導改善拠点校でもあります。“授業は英語で”をどのように実践しているのか。若狭高校の英語教育と、三仙真也教諭さんぜんの活動に着目しました。

○生徒の学習到達状況をできるだけ分かりやすく把握する —英語改善拠点校として—

若狭高校では、学習到達目標（CAN-DO リスト）を作成しています。これは、“生徒の英語のレベルをどこまで伸ばすのか”ということ为学校全体で共有するために定めたものです。最終目的は、“英語の情報を正確に理解し、それに対して積極的に英語で自己発信できる生徒”を育てることで、英語の4技能ごとに、各学年20程度のCAN-DOを設定しています。「県内には4つの拠点校があり、それぞれ独自の学習到達目標を作成していますが、若狭高校は、指導方法について研究・実践を積み重ね、できるだけ細かい目標設定をしています。」と三仙教諭は言います。

○英語が使えるだけでなく“考える”生徒を育てる

三仙教諭は、「可能な限り英語を使う」という方針の下に、割合にすると90%程度を英語で授業を行っています。進め方は、「まず、50分の授業がどのように流れていくかを生徒に示します。そして、その実現に向けた活動として、私が正しい英語を用いて授業を行い、生徒に潤沢なインプットを与え、インテイク活動、アウトプット活動につなげていきます。」と述べています。

授業の展開例は、具体的には、①三仙教諭が適切な英語を使うことで、生徒が正しく表現方法を学び反復して話す（インプット活動）ための環境をつくる、②生徒が陥りやすい間違いや共通した誤りを正した文章に加え、good ideas!として取り上げた他の生徒の文章について音読活動等を通じて自分のものにできる（インテイク活動）ようにする、③どんどん発音してクラス全員が共有し、生徒が内在化した知識や表現を使う活動（アウトプット活動）を行う、の3つの活動を繰り返す。このことが英語力の向上につながると考えています。

○実際の授業はどう組み立てているか

“Good 01’ Charlie Brown”（三省堂教科書）の授業を参考に見ていきましょう。この授業は、一つの単元全体を読み終えた後、その内容を定着させ、活用できることを主目的に、生徒が他の生徒の考えた内容や表現をインテイクし、それを再度アウトプットする活動を盛り込んでいます。授業全体の構成がぶれることなく、生徒に思考力をつけさせながら、題材を用いてどのように豊かな表現力を付けさせるかを考えて授業をデザインしています。

活 動	具 体 的 内 容
ウォーミングアップ (10分)	<ul style="list-style-type: none"> ・本日の授業の見通しを説明し、個々の活動の目標を明らかにする。 ・生徒同士をペアにし、本日の授業テーマ“忘れられない記憶”に関しペアで即興スピーチを促す。生徒それぞれがスピーチ用に持っているノートにキーワードをマッピングさせ、それに基づいてeye-contactやfacial expression（顔表現）

	<p>に注意させてスピーチさせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一定時間後、生徒に対し、自分たちが話した“忘れられない記憶”について、さらに一文追加してペアで即興スピーチするよう促す。さらに、3回目は、ペアを変え、スピーチ時間を短くし、早く話させる。(この課題は時間に余裕がある場合)
よい表現方法について学び、共通する誤りを修正する (10分)	<ul style="list-style-type: none"> ・前回の授業テーマ「本当の成功とは何か」について、生徒が書いた英語の文章から、良い表現や鋭い思考を選び紹介し、授業後半のライティング活動の参考にするよう促す。 ・文法事項や生徒が書いた内容の共通の誤りについて説明し、理解させる。
音読活動 (10分)	<ul style="list-style-type: none"> ・全員で円になり、生徒が書いた文章のうち、良い表現や鋭い思考が表れているものを音読し、表現の定着を図る。 ・生徒が陥りやすい間違いや共通した誤りを正した文章だけでなく、good ideas! として取り上げた他の生徒の文章を、音読活動を通じて内在化し、後のアウトプット活動に取り入れることをねらいとする。教室での生徒同士の英語学習に対するモチベーションアップにもつなげることも意図する。
リーディング (5分)	<ul style="list-style-type: none"> ・教科書の内容をふまえて、それに関連した文章(ここではシュルツが描いた最後の漫画)について読解し、内容の理解を促す。
ライティング (10分)	<ul style="list-style-type: none"> ・ウォーミングアップで活性化された生徒の英語に関する表現や知識の枠組みと音読活動で内在化した表現を基に、「忘れられない記憶」について、60～80字程度で作文する。
発表活動 (10分)	<ul style="list-style-type: none"> ・ペアをつくり、ライティングした内容を全員の前で発表する。一定時間経過後、ペアを変え、全員の前で発表したり、相手の質問に答えながら、自分の表現をブラッシュアップする。 ・ウォーミングアップで表現した内容が授業全体の活動を通じ、より洗練された内容になっているかを基準に評価する。

○授業で気をつける二つのポイント

まず第一に、“英語を話すことで満足させない。”ということです。三仙教諭は、他の教科の学習内容や授業での各教材に対するアプローチの仕方を踏まえ、英語の学習においてもただ内容を理解するのではなく、考え、共有し、それを深める活動を通し思考力を高める活動をしていきたいと考えています。同校の場合、三仙教諭とともに文理探究科の指導にあたる国語科の教員が、特に思考力・判断力・表現力に力点をおき、文章を読んで意見を書かせることを徹底して実施しており、互いに授業研究を行っています。



第二は、“間違いはその場ですぐに修正する”ということです。「生徒が自主的に学ぶ、自立した学習者に成長することが一番です。生徒には、英語の学習は楽しければよい、を越えて、自立した学習者に成長してほしいと考えています。だからこそ、成功への渴望感と、できたことに対する達成感など、次へのステップに向けて自主的に取り組むきっかけを与えることが重要と考えています。発音についても、間違えていたら、絶対に次には進ませません。発音一つをとっても、正しくなければ妥協せず指導することが大切です。それにより長い目で見て、生徒たちの中で正しいアウトプットにつながると考えています。」と言います。「そのためには、教員の発音が正しくないといけません。自信を持って発音できるよう、我々も日々自己研さんに努めなければならないと思います。」

○中学の授業について理解を深めていくことが重要

三仙教諭は、高校入学して間もない1年生を指導するにあたって、高校の教諭は、中学校でどのような授業が行われているのかを知るべきだと強く感じたと言います。「その思いは、文理探究科の1年生を担当することで強くなりました。例えば、今年の高校1年生に対し、私は話す英語のスピードをどの程度に設定するのか。私が話す際に使う語彙や構文はどのレベルにおくのか。それぞれの中学校ごとに、生徒の英語の習得レベルはどの程度かということを理解しておかなければ、子

どもたちが戸惑います。」「小学校・中学校の授業では、子どもたちが興味を持つように、ゲーム活動など様々なアクティビティを入れていかななくてはならず、アイデアが要求されるなど、授業の設計が難しいと思いますが、福井から育つ若者が世界を舞台に活躍できるよう、校種の垣根を越えて英語教育上の問題を共有し、また学ばせていただきたいです。」と語っていました。

さらに自己研さんについても語っています。「英語で話していると、生徒が分からない顔をすることがあります。こちらの話すことが理解されない。その場合は、さらに分かりやすく言葉を置き換えて、授業でのタスクや目標を生徒に伝えていくという努力が教員には求められます。一つのことを多様に表現できる力を自己研さんして身に付けておくことが必要です。」

○文理探究科のこれから

現在の文理探究科の一年生の一部が進級する国際探究科では、英語力の強化が重要になります。そこで、三仙教諭は、特に、英語でのディベート力、プレゼンテーション力を高めていきたいと考えています。「若狭高校は、本年度入学した文理探究科1年生2名と昨年度入学した理数科2年生3名の5名が選抜チームを組み、福井県英語ディベート大会で準優勝することができました。12月15日・16日には、千葉県で開催される全国大会に出場します。せっかく国際探究科ができたのですから、生徒が英語で考え、話すことのできる思考力を高め、常に出場できるように頑張りたいです。」と言います。そのために、今後、特にオバマ大統領やスティーブ・ジョブズのスピーチなどを基に、感情を込めて語れるようにレシテーション（暗唱）活動を行ったり、ディベート活動を英語の授業に積極的に取り入れるなどし、生徒の自己発信能力を高めたいと考えています。また、発音指導も今後も徹底して行っていくとのことです。

< 3年生の学習到達目標（CAN-DO リスト） >

話すこと	書くこと
<ul style="list-style-type: none"> ●より社会性のある話題や他者に関する事項を含めて、叙述する・質問する・理由を述べる・説明する・比較することができる ●与えられたテーマについて、即興で20秒程度話し続けることができる ●自ら会話を始めることができ、誰かを誘ったり、約束を取り付けたりといった基本的な社会生活上の言語機能を遂行することができる 	<ul style="list-style-type: none"> ●自身に直接的に関わる情報について、全体としてスムーズな流れがあり、文と文のつながりがある200語程度の文章を英語で書くことができる ●時系列以外のパラグラフ展開（空間配置、手順、比較対象、因果関係など）にも意識して書くことができる ●不特定多数の読者を想定し、自分の住む地域や学ぶ学校に関する自身の思い入れ、身の上で起こった出来事に関する印象や感想を説明する文章を書くことができる ●主部・述部の整合性、語順等、global errors がほとんどない英文を書くことができる ●書こうとする内容のポイントを明確にトピックスセンテンスとして表現しパラグラフを構成することができる
聞くこと	読むこと
<ul style="list-style-type: none"> ●比較的聞き取りやすい身近な話題や時事問題など社会性の高い話題について120WPM（※）程度で読まれる英語の文章を聞き、その概要と事実情報を正確に理解する ●個々の情報間にある論理的な関係について理解することができる ●慣用表現を含む発話の意図を正確に理解することができる ●音声的な知識を用いて、未知語についても正確に書き取ることができる ●英文を聞いた後に発せられる英語による質問に対し、既習の表現を用いて答えることができる 	<ul style="list-style-type: none"> ●身近な話題から比較的社会性の高い時事問題まで、様々な話題に関する600語程度の文章を80WPM程度の速度で進み、その概要および事実情報を正確に理解できる ●広範囲にわたる場合でも、必要な事実情報を特定し理解することができる ●読み取った事実情報間の論理的な関係を理解することができる ●登場人物の心情に共感したり、著者の意図をくみ取ることができる ●パラグラフ内の構造に加えて、パラグラフ間の構造を意識して読み取ることができる ●各文の内容に関する英語による質問を聞いて/読んで、文章の適切な語句を用いて口頭で答えることができる

※WPM 一分間に読む単語数

全教員向け

“ふるさと”を心に据えて世界に羽ばたく

福井人は、“引っ込み思案”“PRベタ”“謙虚すぎ”などよく言われます。“つつましい”ことは日本人の美德とも言われますが、世界を相手に交渉しようとなるとそれだけではうまくいきません。TPP、海外への高速鉄道網などのインフラ輸出など、ビジネスの世界では、グローバル資本主義が進んでいます。国を挙げて攻勢をかけてくる相手との交渉は困難を極めるでしょう。そうした時に、揺るぎない自信と覚悟を持って相手に対峙できるためには、“自分は何者か”ということについて、確固たる考えを持つことでしょう。それを育てる一つの解が、ふるさとを知ることではないでしょうか。

ここでは、こうしたふるさと教育を特徴的に実施している2つの自治体を取り上げます。

＜敦賀スタンダード＞

○学習指導要領とふるさと教育を連動した「敦賀スタンダードカリキュラム」

敦賀市では、本年度から「敦賀スタンダードカリキュラム」をスタートさせました。これは、学習指導要領に準拠しながら、授業においてできるだけ郷土の題材を取り上げ、敦賀への理解を深める活動です。例えば、4年生の社会科では、東京書籍の教科書の場合、「6 きょう土を開く」という単元があり、通常は全国の用水を切り開いた坂本養川を学びます。しかし、敦賀市の場合、坂本養川の代わりに、敦賀港を開港し、対外貿易の発展に尽くした大和田莊七を取り上げるのです。ふるさとの歴史上の人物の業績を学び、子どもたちの自信と誇りを育むことと、身近な題材を取り上げて子どもの学習への興味関心を高め、学力の向上につなげるという2つを目的に進めています。

○「敦賀スタンダードカリキュラム」の具体的実践により教員の授業力を高める

「敦賀スタンダード」は、「敦賀に生まれ育った子どもたちが、この地の歴史や文化を深く学ぶことで、自分に誇りを持って歩んでほしい」という下野教育長の気持ちが原点です。単なる受験学力ではなく、ふるさとを築いてきた人たちの業績などを深く学び思考することで、敦賀に生まれたことへの自信と誇りを育み、知性ある人材として育てていくことを目標にしています。そして、この目標を達成する一つの具体的活動が「敦賀スタンダードカリキュラム」です。平成22年度より、約40名の教員が参加し、一つ一つの教科の単元ごとに、敦賀の地域資源、歴史資源を題材にできないか地道に研究を重ねてきました。現在は、このカリキュラム策定に当たった教員が提案授業を行い、市内の教員がそれを参観して授業のイメージを高め、各小中学校での実践に役立てています。

○ふるさとが異なる教員の敦賀に対する理解も深める

「敦賀スタンダードカリキュラム」を進めることで、嶺北地域出身者が多い新採用教員が正しく敦賀市の歴史を学ぶという効果も生じています。敦賀市で教える以上、教員は、プロとしてこの地域の歴史を知り、生き生きと子どもたちに伝えていくことが必要です。「敦賀スタンダードカリキュラム」は、教員の敦賀に対する知識レベルを一定以上に保つという効果も持っています。

○「敦賀スタンダード」とは、地域の歴史を正しく知る教育風土づくり

「敦賀スタンダードカリキュラム」は、これまでの授業スタイルを変え、教員に新たな創造力を

求めるもので、実践は簡単ではありません。しかし、古くは渡来人が辿り着いた場所として、また、多くのユダヤ人の命が救われた場所としての敦賀を知ることは、子どもたちの国際感覚に大きな影響を与えることでしょう。また、敦賀市立東浦小・中学校のように、この「敦賀スタンダードカリキュラム」に関連付け、「東浦みかん」などの地域資源や地元の発展に尽くした人材の資料を活用し、地域の人たちの協力を得て地区の歴史や自然を子どもたちに伝える工夫をしているところもあります。「敦賀スタンダードを突き詰めると、敦賀市の歴史とともに地域の歴史を正しく理解させるという教育風土づくりにつながります。」と、同校の橋谷順平校長は語っています。敦賀とともにわが町の歴史も知ることで、ふるさとを愛し、支える気概のある人材が育っていくことでしょう。

<大野市ふるさと文化創造事業>

○豊かな歴史を活かした独自の教育理念を2009年に設定

2009年、大野市は、独自の教育理念「明倫の心を重んじ 育てよう ^{おおのびと}大野人」を策定しました。この教育理念には、人として守り、行うべき道を明らかにしながら、幕末の大野藩の先進性に象徴される進取の気象を受け継いだ、優しく、賢く、たくましい^{おおのびと}大野人に育ててほしいという思いが込められています。

○理念を具現化した施策

この理念の具現化の一つとして、「ふるさと文化創造事業」が挙げられます。事業の一つは、お盆の風物詩「おおの城まつり」で中学生が行う「中学生みこし・ダンスパフォーマンス」。市内の全1年生で「現代風大野音頭」を踊り、同じく市内の3年生全員で大野の四季をテーマにした神輿を担ぎます。伝統の大野音頭に現代風のアレンジを加え、子供たちが参加しやすく、後世に伝えられるものを残したいとの思いからです。

小学生が対象となるものは、「大野の宝 先人に学ぶ」道徳学習と「ふるさと学習交流会」があります。大野市では、以前から、市独自の社会科副教材で、大野市の歴史上の人物を取り上げてきましたが、2009年に、^{どいとただ}土井利忠、^{おさききんどう}尾崎琴洞、^{かなもりながちか}金森長近をテーマとした読み物資料を作成し、4・5・6年生が道徳の時間で活用することにしました。彼らの業績を通じ自分たちが地元のために何ができるのかを考えることを授業のテーマとしています。2011年度からは、さらに子どもたちがふるさとのことを学ぶ機会を増やすため、総合的な学習の時間を使い、小学校の3・4年生が学校ごとに、大野市の魅力を調べあげ、市内全学校の3・4年生と保護者の前で発表する「ふるさと学習交流会」を始めています。

○市民や教員にも“ふるさと”を誇りに思う風土が浸透

大野市教育理念の具現化には、校長会と教頭会が自分たちで研修会を設けたほか、学校教育研究会も分科会をつくり討議しました。大野市は、幕末に至るまで、多くの考古学上の発見と文献が残っています。一昨年度は大野城築城430年祭を開催し、市民にも歴史を誇りに思う風土が育っています。大野出身の教員が多い教育の場にもこうした風土が浸透し、「子どもたちには、ふるさとを誇りに思い、外に向けて発信できるようになってほしい」という気持ちが高まっています。「明倫とは人の生きる道を明らかにすることですが、自分が何者か分からなければそのような気持ちを持ってません。大野のすばらしさを知り、ふるさとへの愛着と誇りが子どもたちの根っこに据わることで明倫の心を育むことができます。」と^{どうちん}道鎮栄一学校教育審議監は語ります。ふるさと文化の創造に取り組むことで、「明倫の心」も大野市の子どもたちに根付いていくことでしょう。

全教員向け

地域ぐるみで異文化と触れあう

—糸生小学校とタイとの交流—

一人の校長の熱い思いで実現したタイとの交流が、子どもたちの成長に加えて、地域全体の異文化への理解を強め、そのことがさらに子どもたちの成長を促す。ここでは、越前町立糸生小学校が20年以上にわたって続けているタイとの交流について取り上げます。

○校長ひとりの熱い思いがきっかけ

糸生小学校とタイとの交流は平成3年に始まります。当時の竹内弘美校長が、「これからグローバル化が進む。子どもたちが世界に目を向けることは非常に意義があること。糸生で国際的な交流を進めるよい方法がないか。」と考え、タイで仕事をしている親族のつてを頼り、カセサート大学附属小学校に辿り着いたことがきっかけです。同校も相互交流に前向きだったため、校長は、ほとんど外国との交流がなかった旧朝日町役場と交渉し、地域住民の理解も得て実現しました。当初、この交流は、糸生小学校とカセサート大学附属小学校の間で行われていましたが、町村合併に伴い町全域の児童も参加できるようにと、越前町の国際担当部署が担当することになりました。糸生小学校は、現在も当事業の拠点校として中心的な役割を担っています。



児童玄関を入った正面に飾られる像。交流5周年記念としてタイから贈られた。

○派遣した子どもの行動様式の変化を児童全体に波及する

現在、越前町からの児童の派遣とタイからの受入れは、隔年で実施されており、昨年度は越前町の児童7名が、10日間カセサート附属小学校に留学生として派遣され、現地でホームステイをしました。このうち糸生小学校から派遣されたのは、児童3名と教員1名です。「派遣されたうちの一人は、とても気持ちの優しく、内気な女の子でした。本人からタイに行きたいとの希望を受けた時は、教員もやや心配しましたが、8月末に帰ってきた後の9月の校内体育大会では、団長として皆を引っ張るなど非常に積極性が出てきて驚きました。」と、山田保子校長は言います。タイに子どもたちを派遣することは、財政的な面での家庭の負担もいささか必要で、全ての子どもたちが行ける訳ではありません。しかし、「相手の土俵に上がり、自分の知らない暮らしを体感し、言葉の通じない中で自分の気持ちを伝えていくという経験は、10日間とはいえ、多感な児童の心を大きく変化させます。また、この児童の行動様式の変化が、他の子どもたちにも刺激となり、良い影響をもたらすのではないのでしょうか。」と山田校長は語っていました。



小ホールの様子。タイとの交流の品のほか、児童が卒業制作で作ったカセサート大学附属小学校の校歌も飾られている。「教員はなかなか覚えられないんですが、子どもたちは皆上手に歌います。」と山田校長は笑う。

○20年の継続で地域の協力が得られる

一方、本年度は、タイからの受け入れを行いました。4名の子どもたちが10日間の日程で越前町を訪れました。ホストファミリー宅で3泊した後、旧糸生中学校を改築した宿泊施設を使って、

両国の児童が寝食を共にしました。児童の世話は、糸生小学校PTAの有志の会と祖父母の会が行い、一人は寝泊まりもします。「携わってくださる人たちの様子を見ると、タイの人たちに喜んでもらえることが、自分たちの喜びにつながっているように思えます。7日間にわたって児童の朝夕の食事を準備し、寝泊りするというのは大変な仕事で、毎日10人以上の人々の関与が必要になります。20年間にわたる交流を通しての友好関係とその灯を消してはいけない、という地域住民の方々の熱意が支えになっているのです。」と山田校長は言っています。全校児童が82人という小さな学校区でこれだけの住民が関われるのは、タイの人々への理解と親近感、そして20年にわたる交流に対する深い思いの表れということができるといえるでしょう。



2012年10月9日、「日本のお金の紹介、箸の使い方」に関する交流（5年生）タイ語の会話シートを使ってコミュニケーションを図り、箸を使って豆つかみに挑戦。

○地域の人たちの温かい受け入れが子どもの受容力を高める

「タイの子どもたちは非常に礼儀正しい。例えば、糸生小学校の低学年児童と鬼ごっこをしましたが、走ろうと裸足になったとき、全員が脱いだスリッパをきちんと並べ、靴下もその上に丁寧に置きます。地域の人たちもそんなタイの子どもたちを見て学ぶべきこともありますし、彼らのことを知れば知るほどかわいさが一層募るのでしょう。」と山田校長は言っています。地域の人たちがタイの子どもたちを心から受け入れる姿は、糸生小学校の児童の心理的な面にも非常によい影響が生じています。外国人との交流というと、交流プログラムも形式的で、その他の時間は一緒にいてもほとんど会話しないことになりがちですが、糸生小学校の場合は、子どもたちが昼休みの時間に自らタイの子どもたちを誘ってサッカーをしたり、自然とそばに寄って行って身振り手振りで会話するなど、内と外の壁をつくらず自由に接しています。地域ぐるみでタイの子どもたちを温かく受け入れていることで、児童たちも安心して彼らに接することができるということです。

○異文化交流を検討してみても

現在、学校単位で外国との交流を行っている学校は、越前町を除くと、公立小・中学校で5校、私立中学1校、高校では、県立で10校、私立4校となっています。「どうやって相手方の学校にアクセスすればよいか分からない。」「外国との交流はやりたいが、そういうことは学校が考えるべきものではない。まず自治体が方針を決定すべきだ。」など、様々な思いや意見があるかと思いますが、糸生小学校の事例をみると、校長の強いリーダーシップで道を切り拓くという方法もあることが分かります。

自治体レベルでは、福井市など9市町が外国と姉妹友好提携を行っています。それぞれの担当課に相談し、交流を働きかけていく方法もあるでしょう。

また、福井県でも、定期的に台湾からの教育旅行の受け入れを行っており、県内の各高校との交流を進めています。1回限りの交流で何ができるかということもありますが、これをきっかけとして深める方法もあると思います。県内の自治体の外国との交流状況や県の施策をお示ししますので、一度、外国との異文化交流事業について、検討してみることをお勧めします。

研究発表会案内（教育研究所）

平24年度 第29回福井県教育研究所 研究発表会 ～学び合い 語り合い 伸ばそう教師力～

【期 日】 平成25年2月14日(木)

【会 場】 福井県教育研究所
福井県立青少年センター

【プログラム紹介】

9:30	10:00	10:10	11:10	11:30	12:20	13:20	14:10	14:25	15:15	15:35	16:40
受付	全体会	レクチャー フォーラム	研究発表 ①	昼食 休憩	研究発表 ②	研究発表 ③					講演会

レクチャーフォーラム

テーマ：「これから求められる教員の資質とは」

講 師：福井大学大学院教授
中央教育審議会 教員の資質能力向上特別部会委員 松木健一 氏



内 容：松木先生から、中央教育審議会の審議のまとめについて、また、特別部会で語られた内容についてお話しいただき、その趣旨や、今求められている教員の資質等について質疑応答などを行います。

※レクチャーフォーラムとは、専門家の講義とこれに続く質疑応答などからなる討議です

講 演 会

テーマ：「授業づくりのコツ・子ども理解のポイント」

講 師：京都女子大学教授、京都女子大学附属小学校長 吉永幸司 氏
【プロフィール】



1940年、滋賀県に生まれる。

公立小学校校長を経て、現職。研究分野は、学校教育学。著書『京女式ノート指導術』(小学館)では、京都女子大学附属小学校が「国語力は人間力」を合言葉に、全校一丸となって取り組んだ独自のノート指導術についてまとめられている。その他、『親子で学ぶ 京女式しつけ』(小学館)など著書多数。第27回読売教育賞(読売新聞社)など受賞多数。

内 容：教材の見方や授業を通して、子どもにいかに関心の灯をつけるか、また、子どもを伸ばす具体的な事例などについてお話しいただきます。

- 「研究発表」については、次号で詳しくお知らせします。
- 参加者を募集中です。研究発表一コマだけでも参加可能です。レクチャーフォーラムや講演会と複数の研究発表を組み合わせるなど、2次案内を参考に興味・関心のあるものには是非参加してください。詳細は教育研究所のホームページを御覧ください。

研究発表会案内（嶺南教育事務所）

平成24年度 第18回 嶺南教育事務所 教育研究発表会



広げよう！学び合いの輪



【期日】 平成25年2月19日(火) 13時10分～16時45分

【会場】 福井県教育庁嶺南教育事務所

【内容】 講 演：福井大学教職大学院教授 森 透 氏
研究発表：嶺南地区小中学校教職員、嶺南教育事務所研究員

【その他】 研究発表会詳細については、次号でお知らせします。

参考図書



■新渡戸稲造『武士道』岩波文庫、1938年10月（採用内定者研修図書）

「武士道はその表徴たる桜花と同じく、日本の土地に固有の花である」。こう述べる新渡戸は、武士道の淵源・特質、民衆への感化を考察し、武士道がいかんにして日本の精神的土壤に開花結実したかを説き明かす。「太平洋の懸橋」たらんと志した人にふさわしく、その論議は常に世界的コンテキストの中で展開される。(Amazon ウェブサイトより)

■吉本隆明ほか『日本人は思想したか』新潮文庫、1998年12月（採用内定者研修図書）

縄文人と弥生人、反目から共存への図式。「あいだ」の表現としての歌。城壁なき律令国家の誕生。仏教変容の宇宙的規模。「近代の超克」は、更なる超克へ…。極東のこの島国で連綿と演じられてきた精神のドラマ。その独自性と真価を、広く世界をも見すえつつ徹底検証する。常に時代と切りむすんできた三知性が集い、火花を散らした全記録。五つの鼎談が今、価値大転換期の混迷を照らす。(Amazon ウェブサイトより)

■「教職課程1月号」(協同出版) —福井の教員が全国に授業づくりを提言—

教員志望者向け雑誌「教職課程」では、福井県の教員が「模擬授業対策 わかる、できる、チカラがつく 授業のつくり方、進め方」というテーマで1年間にわたり、連載を行っています。1月号は、小学校生活、中学校理科、高校数学がテーマです。是非ご覧ください。

芦泉荘からのお知らせ

～同窓会・新年会は芦原温泉「芦泉荘」で～

「おまかせ幹事代行プラン」

期間：平成25年3月31日まで

※土曜、祝祭日前日は1,000円増

1泊2食
美味宴会

たっぷり
飲み放題

まだまだ楽しい
2次会付

オール込

13,500円

お寄せいただいた意見

<第3号「ICTを使って授業を変える」>

- ・平泉教育委員の寄稿の3つのまとめに深く同感。2番目の「よく見る、よく聞く、毎日する」癖をつけることは、教師や子どもたちが熱誠や喜び、感謝の念を持たないと実現しないことなので、その点をもう少し強調してほしい。
- ・ICT教育の導入については、教員に一方的な要求や負担ばかりを強いているのではないか。ICTの活用を手軽なものにする努力を提供者側が続けていかないと教員の負担はますます増加すると思う。

<第2号「活力ある組織の創り方」>

- ・もっと現場のことを分かって書いてほしい。
- ・多忙化解消に向けて県教育委員会がやっていることもあるだろう。そういうことも我々に説明すべきだ。

<その他>

- ・「明日への学び」について県教育委員会に意見をくれと言っても、名乗って批判する人はいない。意見を受け入れるシステムを整備してほしい。
- ・県教育委員会が考えている政策など、これまで分からないことが多かったが、そうしたものを我々にきちんと伝えてくれるので、「明日への学び」は画期的だと思う。

ご意見をお寄せください。

連絡先：福井県学校教育政策課

住所：福井市大手 3-17-1

TEL：0776-20-0295

FAX：0776-20-0668

Mail：gakuyousei@pref.fukui.lg.jp